

## 「京都歴史災害研究」発刊にあたって

吉越昭久\*

立命館大学では、2003年度に「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」が、大学としては4つめの21世紀COEプログラムに採択された。このプログラムが目指すものは、文化遺産を核とした歴史都市の防災について考究し、当該分野における学術体系を構築すると共に、歴史都市の防災システムに関する技術開発を進め、文化遺産や歴史都市への造詣の深い防災研究者を育成することにある。このプロジェクトの特徴は、土木工学・建築学・情報学・政策科学・地理学・歴史学などの学問分野を背景にして、問題発見や提起を行う「実態論・現象論」、解決案の提示を行う「技術論」、社会的実践システムを構築する「計画論・政策論」の3つの視点から、統合化された学術体系や社会的要請に応える技術体系を確立することである。

以上のような目的・特徴をもつプログラムが、2003年の夏以降本格的に動き始めた。立命館大学では、このような研究を支援し、国内外の歴史都市の防災研究に関わる研究者の集まる場として、立命館大学歴史都市防災研究センター（土岐憲三センター長）を2003年に設立した。このセンターでは、UNESCOなどの国際機関や多くの国内外の大学・諸機関とも連携をとりながら、研究を進めつつある。このセンターには、このような具体的な研究を進める組織として、いくつかの研究会が設置された。その一つとして、「京都歴史災害研究会」は位置づけられる。

「京都歴史災害研究会」は、以上のような経緯のもとで、21世紀COEプログラムの「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」の研究のうち、主に過去の災害の復原などの研究を行う組織として2003年10月に発足した。

ところで、これまで歴史学の分野では、災害に関する研究はあまり行われてこなかった。また、災害科学や防災科学の分野でも、歴史的なアプローチはそう多くはない。この研究会を通して、これら多くの分野における交流を盛んにすることも狙いの一つである。その結果、あらたな視点をもった災害研究・防災研究が行われるようになると思う。またこのことは、21世紀COEプログラムの本来の目的とも合致することとなるであろう。

この研究会では、毎月1回程度の頻度で研究会を開催し、研究発表や情報の交換を行っている。会の事務局は、文学部・文学研究科の4名の研究推進メンバーによって構成されている。参加者は、研究推進メンバーだけでなく、全学の歴史災害に関わる教員、大学院生の他、全国の大学・諸機関の研究者、自治体の職員などが含まれ、毎回20～30名程度の出席者がある。

「京都歴史災害研究会」は、これまで4回開催した。多少長くなるが、その概要を記しておこう。第1回目は、2003年11月21日に、土岐憲三立命館大学教授による「文化財防災ことはじめ」、植村善博仏教大学教授による「京都の地震環境とその後の進展」の2件の講演と質疑が行われた。第2回目は、

---

\* 立命館大学教授  
21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」研究推進メンバー（サブリーダー）  
立命館大学歴史都市防災研究センター副センター長

2003年12月19日に、水越允治三重大学名誉教授による「歴史時代の日々の天候記録集」、第3回目は、2004年1月16日に、河角龍典立命館大学講師による「歴史時代の地形環境変化と鴨川の水害」、第4回目は、2004年3月18日に、鈴木淳東京大学助教授による「消防の近代化—江戸・東京を中心に—」の講演と質疑がそれぞれ行われた。以降も、このような研究会を開催していく予定である。

研究会では、このような会の開催だけでなく、会誌「京都歴史災害研究」の刊行を計画しており、本会誌が創刊号となる。この会誌には、歴史災害に関する論文・短報・書評・史資料・文献目録などを掲載する予定である。掲載するものは、基本的には研究会参加者などから投稿によるものとする。投稿原稿は、会の事務局のチェックを経へて、掲載することとする。なお、執筆要項は、会誌の末尾に掲載したが、学問分野によってはこの形式と異なることもあるので、その場合には事務局にご相談いただきたい。会誌は、当面年に1、2冊のペースで刊行していく予定である。

「京都歴史災害研究」第1号（創刊号）の内容は、論文2件（いずれも、研究会の講演内容をもとにしたもの）と、文献目録（その1）などになった。御一読いただければ幸いである。

本会誌が、今後、歴史災害研究の重要な学術雑誌に育ち、掲載論文などが歴史災害に関する熱い議論を巻き起こすようになればこれ以上の喜びはない。「京都歴史災害研究」の刊行によって、21世紀COEプロジェクト「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」が大きな成果をあげられることを願っている。